

# そうじの力だより

VOL.179



## 支援事例紹介

最善を尽くして働きやすい職場を作る！

「3K職場」から「非常識なクリーンファンドライ」へ

岐阜県関市の鉄製品の製造メーカー、(株)マツバラ。ここで私がお手伝いして「そうじ」の活動をはじめてから、ちょうど一〇年が経ちます。

铸造というのは、鉄をキュポラと呼ばれる炉で溶かして、砂で出来た铸型に流し込んで製品を作るプロセスのこと。だから工場内は火花と粉塵が舞い散る、過酷な環境です。

日々のそうじに加え、毎月一回、調整日に集中的なそうじを行っています。推進事務局と私が毎月、工場内を巡回し、取り組み状況をチェックし、アドバイスをしています。

また、年に二回、「そうじ」の発表会と表彰式が行われます。各部署が、この半年間の活動を発表し、実際の現場の状況と合わせて社長たちが審査し、上位グループを表彰するのです。

今回はコロナの影響で、社員全員を一堂に集めての発表会はやめ、一人ずつ個別に呼んでの発表となりました。私もオンラインで参加しました。

火花と粉塵が舞う工場ですから、どんなに頑張っても、粉塵をゼロにすることは不可能です。つまり、すべてを完璧にキレイにすることは、現実的にできないのです。

そこで、各部署ごとに重点項目を決めてもらい、それを徹底的に実行するように促しました。

たとえば、キュポラ係。鉄を溶かす炉で作業する人たちです。ここは工場

内でも、もともと粉塵が溜まる場所。このキュポラの中段フロアを「ビュースポット」にする、という方針を立てました。



以前のキュポラ中段フロア

以前は五〇センチほども粉塵が積もっていました。いまは床面が蛍光灯を反射して光っています。それも、一時的なものではありません。いつ見てもこうなっているのですから、彼らの努力には頭が下がります。



現在のキュポラ中段フロア

そして最近では、あらためて、使っていないものを捨てることに力を入れています。

同社の铸造の機械は、古いものが多い、中には三〇年選手のものもあります。それだけ、長持ちさせている、ということ。ただそれだけに、不具合が起きたときに交換する部品が、市

中にない場合があります。

そのため、予備部品を大量にストックしてあります。万が一壊れたときに、それがないと交換ができないからです。しかしそのために、予備部品を置いておく広大なスペースが必要で、それが敷地を圧迫し、管理も行き届いていませんでした。

社長の強い指示により、ある程度のリスクを覚悟で、かなりの予備部品を捨てることになりました。



以前は予備部品が保管されていた倉庫

また、使用していない集塵機やフライス(切削工具)も廃棄し、広い作業スペースを確保することができました。金型の保管も、頭の痛い課題です。長年にわたって使用実績のない金型を、お客様と交渉して返却したり廃棄したりしています。

こうしたことは、思い切りがないとできないことであり、やはり社長のリーダーシップがものを言います。

また、工場内の不明物や「チョイ置き」をなくすため、仮置きを表示するようにしています。こうすることで、誰が見ても所在がわかり、むやみに物が増えることを防ぐことができます。

一方で、問題もありました。部署によって温度差があるのです。汚く乱れている部署は、そう

じだけでなく、他にも問題を抱えていることが多く、相関関係があります。ですから、リーダーシップとチームワークを改善すべく、様々なテコ入れを行っています。

そのかいあって、少しずつですが、こうした問題も改善に向かっています。

松原史尚社長は、同社の白い作業服を白のまま保つように、と社員に説いています。社長の父上(先々代)が導入された、

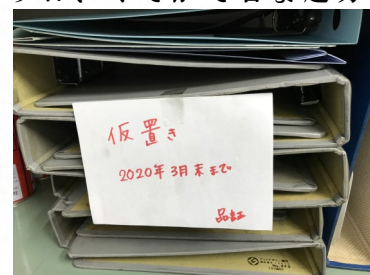
铸造業として非常に識な白い作業服を白のままに保つところ、

「非常識なクリーンファンドライ」

の証なのではないでしょうか。同社の「非常識」への挑戦に、終わりはありません。



白い作業服で粉塵のそうじをする社員



「仮置き」の表示をして管理する

小早祥一郎の著書『そうじ』を見ると、なぜ会社がよくなるのか』好評発売中！ご購入は、お近くの書店またはネット通販でどうぞ。

## 今月の読書から

『復活の日』小松左京 著  
～人間の英知に期待したい～



まるで予言の書です。この本で描かれていることは、現在我われが武漢コロナウィルスで経験していることと、ほぼ同じです。

ある日、新種のかぜウィルスによって、世界中がパンデミックに陥り、社会経済機能がマヒし、どんどん人が死んでいき、やがて人類は滅亡してしまいます。

正確には、かぜウィルスだけでなく、原因不明の病原体(宇宙から来たとも言われる)との複合作用によるパンデミックで、人類はワクチンも対処療法薬も開発することができず、窮地に陥っていくのです。

しかも、これらのウィルスや病原体は、実はある国の生物兵器研究所が開発したもので、それが諜報活動の過程で漏れ出してしまったのが事の発端だった、とい

うところまで、なんだか現在の状況を暗示しているようです。

ほぼすべての人類が死滅する中で、たまたま南極大陸にいた約1万人の人たちだけが生き延びるといのが、この本の前半のストーリーです。

ただ、私が以前にある識者から聞いた話では、世界異変によって人類の人口が三分の一を割り込むと、文明の維持は困難だそうです。だから、もし現実に、南極で1万人の人たちが生き残ったとしても、彼らがこの文明を維持していくのは無理でしょう。

さて驚くのは、この本が書かれたのは、なんと昭和39年(1964)、つまり、前回の東京オリンピックの年、私が生まれる4年も前のことです。

こんな時代から、ウィルス感染症の脅威というのは認識されていた、ということ。しかも、その脅威はその当時と現在とで、何ら変わりはない、ということに、とてつもない恐怖を感じます。これだけ科学技術や医療が進歩しているにもかかわらず、

です。

私が子どもの頃、癌は不治の病でした。患者への告知は、基本的にタブーでした。ところが今、癌は決して不治の病ではありません。告知も、よほど末期のものでない限り、普通に行われています。

AIDSも、流行が始まった当時は不治の病でしたが、今では、根治はしないものの、治療薬の開発により、延命率はグッと高くなりました。

ところが、インフルエンザを含むかぜウィルス感染症だけは、昭和39年から、その脅威が何ら変わっていないのです。その恐ろしさを、我われは今まさに身をもって体験しているわけです。

それでも私は、医療従事者の治療努力、科学者の皆さんの研究努力、そして、我われ一般民間人の行動制御努力によって、こうしたウィルス感染症を克服できると信じています。

私たち人類を救えるのは、私たち自身の日々の行動なのです。今こそ人類の英知を結集すべきときです。(小早)

### 編集後記

コナン！コナン！コナン！

ウチの女房と中3の娘は、アニメの『名探偵コナン』が大好き。

コロナ禍の休校で暇な娘は、毎日のようにシリーズの映画を観ています。

当初、まったく興味のなかった私ですが、傍でチラチラ見ているうちに、その面白さが理解でき、今では、けっこう一緒になって観ています。

現実的にあり得ない設定が多いので、「なんでここは〇〇なんだ？」「こんなことありえないだろ」と、ぶつぶつと親父ツッコミを入れて煙たがられています。(小早)



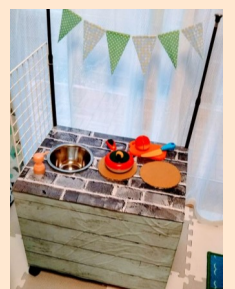
### 飛鳥のつばやき

たまには他の遊びがしたい

毎日長男に付き合わされる、ミニカーを使っの「交通事故ごっこ」にお手上げの母(飽きた)。何とか他の遊びをたく、家にあるものを駆使してキッチンセットを自作しました。

さて、どう遊んでくれるかな？と楽しみにしておりましたが、案の定数分後には、シンクの中に大量のミニカーが…。

「ここはせいびこうじょう」とのことです。事故で壊れた車を修理するそうです。逃れられない…。(大槻)



## 株式会社そうじの力

そうじで組織と人を磨く、  
日本で唯一の研修会社

弊社は“そうじ＝環境整備”を通じ

た「企業風土改革」を支援します。

講義、実習、チームミーティング、計画作り、現場検証を通じて、社長と社員の意識改革を図り、健全な企業風土作りをお手伝いします。

支援期間は1年から。毎月1回訪問を原則としますが、状況とご要望に応じて、プログラムをオーダーメイドします。また各種団体向けの講演のご依頼も受け付けております。(全国対応)

そうじの力だより第179号 2020年6月1日発行 発行者：小早 祥一郎 (株式会社そうじの力 代表取締役)

〒370-0078 群馬県高崎市上小島町307-1 TEL:050-3709-2333 FAX : 050-6868-2721 メール : [info@soujinochikara.com](mailto:info@soujinochikara.com)